

A 語句の意味と読み

(1) かわいい・愛らしい(いとおしい) / ×「美しい・きれい」だ。小さいもの・幼いものをいとおしく思う気持ちを表す。定期テスト・入試の最頻出語。

(2) 幼い子ども・赤ん坊(乳幼児) / 漢字では「稚児」。「子ども」とだけ訳さず「幼い」を必ず入れる。

(3) ねずみの鳴き声に似せて、口で「ちゅっちゅっ」と音を立てること。 / 雀の子を呼び寄せるためのしぐさ。だから雀が「をどり来る」。

(4) ～ぐらい・～ほど(おおよその程度を表す) / 全体で「二、三歳ぐらいの幼児」。限定の「～だけ」ではない。

(5) 目ざとく。(小さなものも見のがさないほど) 目が早く。すばやく目にとめて。 / 下の「見つけて」にかかる連用修飾語で、「目ざとに見つけて＝すばやく見つけて」と二語セットで訳す。まぎらわしい誤答は「目つきが鋭い」。目ざと＝目が早い、であって目つきの話ではない。なお本文の形「目ざとに」は形容詞「目ざとし」の活用形(連用形は「目ざとく」)ではなく、形容動詞「目ざとなり」の連用形とされる。品詞名はお使いの教科書の説明に合わせることに。

(6) いかにもかわいらしい様子の(かわいらしげな) / 「～げなり」＝いかにも～そう。 「をかし」の基本は「趣がある」だが、ここは幼児の指なので「かわいらしい」。

(7) 肩のあたりで切りそろえた、子どもの髪型(尼そぎ) / 尼の髪に似ることからの名。「頭はあまそぎなるちご」＝おかっぱ頭の幼い子ども。

B 文法(助動詞・助詞)

(8) 「をどり」＝動詞「をどる(躍る＝飛びはねる)」 / 「来る」＝動詞「く(来)」 / 「をどる」＋「来る」が結びついてできた語(複合動詞)。ここでは、もとの二つの動詞に分けて答える。「来る」は力行変格活用「く」の連体形。

(9) 助動詞「けり」 / 過去(～た) / 連用形「あり」に接続。地の文なので、詠嘆ではなく過去にとる。下の「を」に続くので連体形「ける」。

(10) 主格(～が)。「小さなごみがあつたのを」の意。 / 「雀の子の、…をどり来る」の下の「の」(＝雀の子が)、「二つ三つばかりなるちごの、…はひ来る」の「の」も同じ主格。※「雀の」の方は「～の」(連体格)で別もの。

(11) 助動詞「たり」 / ここは完了(～た) / 連体形 / 連用形「見せ」に接続。下に「こと・様子」を補って受ける準体法なので連体形。「たり」は完了・存続の助動詞だが、ここは「見せた」と完了で訳す。

(12) 「おほへ」＝動詞「おほふ(覆ふ)」 / 「る」＝完了・存続の助動詞「り」の連体形(ここは存続で「～ている」) / 「り」は四段動詞の已然形につくと説明する教科書と、命令形につくと説明する教科書がある。どちらで習ったかは、お使いの教科書の説明に合わせることに。

(13) 打消の接続(～ないで・～せずに)を表す接続助詞。 / 未然形に接続する。「ず＋て」がつづまった形とされる。「かき払いもしないで」と訳す。ここが訳せるかで差がつく。

C 主語・指す内容

(14) 二つ三つばかりなるちご / 直前の「ちごの」の「の」が主格。「幼児が急いではって来る道に」とつながる。

(15) (二つ三つばかりなる) ちご＝幼児の指(ゆび) / 「をかしげなるおよびにとらへて」＝「かわいらしい指でつまんで」。つまんだのは、はって来たその幼児。「および＝指」は現代語とズレる語の代表。

(16) (いとちひさき) 塵＝道に落ちていた、とても小さなごみ / 大人なら気づかないほど小さなものを見つけた、というのがこの場面の要。

(17) 始め「二つ三つ」 / 終わり「見せたる」 / 「二つ三つばかりなるちごの、…大人などに見せたる」までの一連の動作全体を受けている。

D 口語訳

(18) (例) 瓜に描いた、幼い子どもの顔。 / 「かきたる」＝描いた。「かく」は「書く」「描く」どちらの意味にもなる。

(19) (例) 雀の子が、(人が) ねずみの鳴きまねをすると、飛びはねるようにしてやって来る(様子)。 / 「の」＝が(主格)、「に」＝～すると(順接の確定条件)。

(20) (例) とても小さなごみがあつたのを / 「いと」＝とても、「塵」＝ごみ、「の」＝が、「ける」＝過去「けり」の連体形。

(21) (例) 目に髪がかぶさっているのを、かき払いもしないで / 「の」＝が、「おほへる」＝おおっている、「で」＝～ないで。

E 内容・記述

(22) (例) 大人なら見のがすほど小さなごみを、幼児がすばやく見つけた点。(三十字) / 「小さなものを見のがさない」という一点が、この章段全体の芯になっている。

(23) (例) 髪が目にかかっても払おうとせず、首をかしげて見入る、幼さと無心さ。(三十三字) / 「かきはやらで」「うちかたぶきて」の二つの動作から読み取る。訳をそのまま書き写すのではなく、「どこがかわいいのか」を書く。

(24) (例) ①瓜に描いた幼い子どもの顔 ②ねず鳴きに寄って来る雀の子 ③小さなごみを見つけて大人に見せる幼児 ④髪が目にかかったまま首をかしげて物を見る子ども / 冒頭の「うつくしきもの。」は見出し(お題)なので数に入れない。そのあとを句点ごとに区切ると、ちょうど四つになる。

(25) (例) どれも小さくて幼く、あどけないものであるという点。(二十五字) / ★「小さい・幼い・あどけない」の三語で書けば外さない。記述の答えはほぼここに集まる。

F 文学史

(26) 『枕草子』／清少納言／平安時代(中期) / 清少納言は一条天皇の中宮定子に仕えた女房。『源氏物語』の紫式部とほぼ同時代。

(27) 随筆 / 『枕草子』『方丈記』(鴨長明)『徒然草』(兼好法師)の三つで「日本三大随筆」。『枕草子』は日本最初の随筆とされる。

(28) 類聚的章段(るいじゅうてきしょうだん)／ものづくし / ほかに随想的章段(ずいそうてきしょうだん・「春はあけぼの」など)・日記的章段(にっきてきしょうだん・宮中のできごと)がある。三分類はセットで覚える。

【現代語訳(全文)】

かわいらしいもの。瓜に描いた、幼い子どもの顔。雀の子が、(人が)ねずみの鳴きまねをすると、飛びはねるようにしてやって来る(様子)。

二、三歳ぐらいの幼い子どもが、急いではって来る道の途中に、とても小さなごみがあったのをすばやく見つけて、たいそうかわいらしい指でつまんで、大人などに見せた(その様子)は、たいそうかわいらしい。

髪を尻そぎ(肩のあたりで切りそろえた髪型)にした幼い子どもが、目に髪がかぶさっているのをかき払いもしないで、首を少しかたむけて物などを見ているのも、かわいらしい。